

01・二次元みたいな女の子（と、三次元のさえないわたし）

とある年の秋。十月四日、月曜日。八時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。気温は二十度程度。

そろそろ寒くなってきたそう。でも、もう少しの間は心地よく過ごせそう……そんな、風が気持ちいい秋の朝。

場所は、主人公が通う学校『公立 鵠（くぐい）』まで、あと十五分ほどの位置にある住宅街。

もう少し歩けば、学校最寄りの地下鉄駅『鵠中央駅』が見えてくる。といったところだ。

〈主人公〉

「……………」

そんな道を、主人公は今、一人黙々と歩き続けている。

生ける屍のような暗い面持ちで、そのくせ足腰だけは妙にしっかりと。

『まあ、歩けない事もないよね』という距離を、淡々と歩いている。

主人公は鵠の二年生で『鵠中央駅』からは三駅離れた駅を最寄りとし、普段は地下鉄通学をしている。

だが、今日はあえて、オール徒歩で登校していた。

今日は地下鉄でスイスイ登校するのではなく、考え事をしながら、歩いて向かいたい。そんな気分だったからだ。

ところで、ここで『その位の距離なら、自転車で通えばいいじゃないの』という声が聞こえてきそうだが、主人公は自転車に乗れない。びっくりするほどスポーツが苦手なのだ。ゆえに、主人公は歩いている。別に歩く必要はない道を、あえて踏みしめている。

〈主人公〉

「……………」

このように、今日の主人公は、いつもとは少し違う時間帯に、いつもとは少し違う方法で通学していた。

だからこれから、いつもとは大きく違う事が起きる。

だが……彼女はまだそれを知らない。

現実の自分自身ではなく、二次元の推しの事で頭がいっぱいだからだ。

〈主人公〉

「……はあ……」

主人公、泣きはらした目をさらに涙で湿らせ、大きくため息をつく。

その顔は真っ青を通り越して、真っ白。

目の下には深いクマがくつきりと現れ、寝不足のせいで、己の身体をコントロールする事もままならない。

とにかく全身が悲哀に満ちて、しわしわになっていた。

それでも、主人公はテクテク歩みを進めていく。

ゆらゆらと落ち着きなく、ゾンビのようにもたついて揺れる上半身……と、同世代の女子よりも健脚であるがゆえの、スムーズに動き続ける下半身。

そんな不気味なコントラストを一つの身体に有しながら、どんどん歩いて行く。

そう。昨日の主人公は、推しを想うがゆえに一睡もできなかった。

日付が変わってすぐに推しの大事件に直面し、この件で頭がいっぱいのまま、朝を迎えたからだ。

なので主人公は、かれこれもう八時間、ぶっ通しで悲しみの果てにいる。

とつくに疲れ果て、ほぼ使い物にならない脳で、それでも推しキャラクターを想っている。

——ああ……むーちゃん。どこへ行ってしまったんだよお。

『絶対大丈夫です』って言ったのに、全然大丈夫じゃなかったじゃん。

『絶対帰ってきます』って言ったのに。信じてたのに。何で戻ってこないのお……？  
まさか、本当に悪堕ちしたなんて言わないよね……？

……話は、約八時間前にさかのぼる。

主人公は現在、毎週月曜日に出る漫画雑誌『週刊アルエット』通称『週アル』で連載中の人気コミック『封魔（ふうま）のツバサと白き空』に夢中だ。

中でも今話題に出た『むーちゃん』……『六車 あゆむ（むぐるま あゆむ）』という女性キャラクターが大好きで、現在の主人公のオタクライフは、彼女中心に回っていると言っているではない。

そんなむーちゃんは、容姿も性格も生きざまも、すべて主人公の好みど真ん中。よさを一つ一つ上げていくときりがないほどだが、まず、見た目に限定しても、主人公的には素晴らしきの宝庫である。

たれ目の涼しげな目つきに、女性らしさを強調する、腰までのストレートロングヘア。

いつも余裕綽々で、こちらを見透かすようなまなざしも、どこをとってもポリウム満点の、むっちりとした体型もいい。

右目尻のほくろも、ものすごくセクシーだ。

そんなむーちゃん激推しの主人公の趣味はイラストを描く事なのだが、その技術は、むーちゃんに出会ってから、飛躍的に向上した。

自分なりに彼女の魅力を再現しようとした結果、めっちゃめっちゃ絵が上手くなったのである。

つまりはまあ、主人公にとって、むーちゃんは完璧な上、自分を成長させてくれる存在だ。

むーちゃん以上に好きになれるキャラクターなんて今までいなかったし、これからも、きつとそう簡単には出会えないだろう。

そう思うほどの勢いで、愛しているのである。

……しかし、そんなむーちゃんに異変が起きた。

本日公開の最新話にて、

“わたくしはわたくしが『最も良い』と思う事がしたいのです。……たとえばそれが、完璧な正解ではなかったとしても”

“ すぐに戻ります。どうか信じて下さいませ ”

と言に残し……そのまま姿を消したのだ。

—— しかも、前向きな言葉とは裏腹に『死んだ』とも『敵の思想に共鳴した結果、悪堕ちした』とも解釈できる、衝撃的な展開と共に。

主人公はこの事態を、今日の零時、週アル電子書籍版を読んで知った。  
本来なら、主人公は紙派である。

月曜朝に雑誌を購入し、友達や部活仲間、そして家族と、みんなでワイワイ読むのが好きだからだ。

ゆえに普段の主人公は、日曜日の夜からネットを断ち、日付が変わる前に布団に入る。  
電書派のファンが投稿するネタバレを踏まないよう、非常に気を付けているのだ。

そして朝になったらできるだけ早く支度して家を飛び出し、家の最寄りのコンビニで雑誌を買い、読む。

そんなサイクルが出来上がっていた。

……だが、今週はそうはいかなかった。

先週号の時点で、むーちゃんは生死が危うい状態にあった。

当然むーちゃん推し界限は緊張状態にあり、全員が次号の発売日にビビっていた。だから、主人公は思った。

『今週ばかりは、朝まで待てない。電書版を買おう』と。

かくして起きたのがこの『むーちゃん事変』だ。

当然、主人公は大ショック。このありさまである。

最新話を読んだ瞬間から現在に至るまで、ひたすら『そんな……そんな……』と壊れた機械のように繰り返し、そのまま学校に到着する事だろう。

そんなにつらいのなら、今日一日位『むーちゃん休暇』をいただいてもいいところだが、主人公は登校している。

真面目なのだ。推しに見せられない事はできないのである。

という事で、主人公は歩きながら悩んでいた。

このままむーちゃんを信じて待つべきか？

それとも疑い、呪詛を吐きながら過ごすべきか？

と。

そんなの考えるまでもない。前者に決まっている。

だが、推しの言葉を素直に信じて待ち続けられるほど、主人公は立派な人間ではない。ハートが弱いのだ。

だから主人公は、己のふがいなさを呪いながら、うつむいて、自分の靴を眺めるようにして歩き続ける。

そこに映るのは、当然ながら自分の足と、アスファルトの地面のみ。

『これからどうすればいいのか』とか、『来週以降のむーちゃんの動向』といった耳寄り情報などは、書いてあるはずもない。

ここは平和な地方都市で、今日はいつもの月曜日だ。

たとえばちょっと通学路を変えてみたところで、変化などありはしないように思えた。

〈主人公〉

「……………」

しかしここで、『変化』は起こる。

黒一色の道に、ふと色がついたのだ。



それはあまりにも美しく、それゆえに強烈な違和感を放つ。  
だから主人公は、目の前の光景をすぐには呑み込めなくて、思わず立ち止まってしまった。

——え……？ 何これ。

主人公、ぱちぱちと何度か瞬きをしたのち、ようやく事態を理解する。  
そこに落ちているのは、果物だった。

道の先に向かって、いくつものオレンジが、点々と落ちている。

——あつ。

そっか。これ、オレンジか。

えっ。『そっか』じゃないよ。なんでこんなものが落ちてるんだ。落とし物か？  
……拾っておかないと。

〈主人公〉

「よいしょと」

主人公、反射的に橙色の丸い果物を一つ拾うと、次の一つも拾って『地味に角度がきつい』事で知られている坂道を登りながら、一個ずつ手持ちの果実を増やしていく。

その姿はまるでフルーツの独り占めをしている小動物だが、本人は必死だ。なにせ果物である。誰かに踏みつけられでもしたら大変だ。

可能な限り、自分が守らなくてはならない。

そう思いながら、主人公は先へ進んでいく。

すると、そろそろ抱えきれなくなってきたところで、さらなる異変が訪れた。

おいおいおいおい……。

あれって、もしかして……。

主人公、顔を引きつらせ、思わず頭を抱えなくなるが、この状況ではそれもできない。

主人公のいまひとつ頼りない視力でもわかる。

さらに三步ほど先に行ったところに、今度は定期入れが落ちている。

〈主人公〉

「……つとに……」

主人公、三步進み終わると、両手が既にオレンジでふさがっているのも構わず、しゃがみこむ。

それから何とか両手をうまく使って定期入れを拾い上げると、その中には、IC定期券が一枚。

表側に地下鉄の駅名が二個と『タマカワ リサ』という、女性と思われし名前が印字されたカードが入っていた。

派手でギヤルめのデザインとその区間から推測するに、持ち主は近隣の学校『逢瀬学園』の学生ではないだろうか。

まあ、今時名前や持ち物の好みで性別を推測するのは時代遅れな気もするが、それは置いておいて。

とにかく、持ち主が逢瀬学園の生徒なら、この定期は帰りも使う。  
できるだけ早く届ける必要があるだろう。

……オレンジの持ち主を見つけたら、次は交番だな。  
今日は忙しいなあ……。早く出てきてよかったな。

主人公、そんな事を考えながら、さらに坂を登っていく。  
そう。このような状況にも、主人公は意外と早く順応していた。

慣れているのだ。こういう事に。

主人公は生まれついでの人助け気質で、二足歩行を習得する頃には、すでに道で見つけた落とし物をお母さんに届けていた。

そんな生き方を続けていれば、やがて届ける相手はお母さんから交番、あるいは持ち主本人に変わり、並行して、道案内とか、迷子や迷いペットの保護とか、機械の操作説明とか。倒れた旗とか看板を直すとか、重い荷物をしばらく代わりに持つとか。飛んできたボールを、なんとかキャッチするとか……そういうスキルもすっかり身についた。

だが、そんな人助けの達人と言えど、二件同時に処理した事はあまりない。

今回は二件とも落とし物だからどうかできそうだが、たとえばここに道案内や迷子まで加わったら、さすがの主人公も対処しきれないかもしれないかもしれない。

——まあ、そんな事はさすがに起きないだろ！　アハハ！

しかし、ここで油断したのがいけない。

その途端、ガシヤガシヤガシヤッ！　と、金属がぐちゃぐちゃに折り重なるような激しい音が辺りに鳴り響き、主人公は、一気に緊張状態に置かれてしまったからだ。

な、な、なんだあ……？

主人公、その音に思わずクラツとしながらもなんとか持ちこたえ、顔を上げる。

そう。ひとまず今考えるべきは、物音の件ではなくオレンジの件だ。そうだ。そうだろう？ と、自分を落ち着かせる。

視認できるオレンジは、残り一個。

先ほどの音には嫌な予感しかないが、オレンジさえ拾いきって持ち主に返せば、主人公のクエストはおおむね終わり。

あとはダツシユで交番まで行って定期入れを届ければ、万事解決。

学校にいったらむーちゃんの件について、友人達に一杯慰めてもらって。そうするうちに今日は終わり、傷ついた心も、多少は癒えるだろう。

そう思っていた。

しかし、目をそむけたくなる現実、すでに無視できない位置にあった。

落ちているのは、果物と定期入れだけではなかったのだ。

正確には『落ちた』のではなく『倒れた』のだが……。

えーつと。

ちよつとこれは、やばいな。

……どうしょ。

そのあまりの惨状に、主人公の意識はいよいよ遠のく。  
おまけに近くで、誰かが泣いている声までしてきた……。

【※音声ここから※】

## SE1 住宅街の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0—5秒ほど流して『颯太』のセリフ】

【▲2で一度フェードアウトした後、再開してまたトラック終了まで流し続ける】

〈颯太〉

## ▲ボイス加工あり

【SE1から5秒ほど遅れて聞こえ始める】

【フェードインして始まる】

【やや遅れて、『美津子』の声が聞こえ始める】

「なので、『美津子』の声が聞き取りやすく聞こえる程度の、小さめの音量で流す」

「▲1 でフェードアウトし、次の颯太のセリフに切り替わる」

★「※60秒※ ほど泣き続ける。

母親とはぐれ、不安と混乱で泣いている。

次のセリフと同じ内容を、少しずつ言い方や泣き方を変えながら繰り返して泣き続ける。未就学児と思われる、可愛らしく中性的な出で立ちの幼い男の子。

彼の名前は『颯太（そうた）』。

大人しく利発そうな雰囲気、比較的聞き分けのよさそうな子。

普段は母親からも、先生からも『手のかからないいい子』として知られている。

しかし、今は母親が近くに居ない恐ろしさで、我を失っている」★★★★★★★★★★

★

うわーん。うわーん。うわあーん……！

お母さんどこ、お母さんどこ。お母さんどこー？

やだやだやだ。なんで？ なんでいないの。なんでー？

うわーん。やだやだやだ。やだやだやだ。うわーん。えーん。えーん……！」

〈美津子〉

「主人公が立ったまま白目をむいて、ぐったりしているのに気づいていない。

主人公に助けを求めて、一方的に話し続けている。

彼女の名前は『美津子』。七十代ほどと思われる、身なりのよい女性である。

美津子は元々マイペースな性格な上、ちょっとその場の空気を読むのが苦手なタイプだ。そのため、主人公がこの状況にパンクしそうなほど困っている事も、周囲の状況にも気づかず、自分の要望を最優先で聞いてもらおうとしている。

当然、颯太の存在には気づかず、その声も、まるで耳に入っていない。

しかし、全く悪気はない。本当に気づいていないだけなのである。

また、そんな性格が話し方にも出ているため、口調はおっとりしている。

そのため『切迫している』『返事しない主人公を責めている』ようには聞こえない。

あくまで穏やかに尋ねている。

『逢瀬学園前』とは、地下鉄駅の名前。

美津子は今、最近親しくなった、逢瀬学園前駅付近に住んでいる友達宅へ、親戚にもあったオレンジをおみやげに遊びに行くところである。

しかし、今回が初訪問。比較的近所なので徒歩で行こうとしたが、そのうち、うっかり道に迷ってしまった」

それでね。あなた、わかります？

逢瀬（おうせ）学園前。逢瀬学園前に行きたいんです。  
でもここ、何だか前通った道と違う気がするのよねえ。



駆って。どっちだかわかるかしら？」

SE2 美津子が主人公の肩を握る音

【最初から最後まで流す】

〈美津子〉

「肩に触れて、主人公がぐったりしている事に気づかない。  
変わらず、マイペースに質問し続ける。

『この辺の学校の子なら、当然知ってるわよね?』という意味で聞いている」  
あなた、この辺の学校の子よね?」

〈主人公〉

「……はっ！」

主人公、美津子に肩に触れられてから、ワントempo遅れて意識を取り戻す。  
状況があまりにも悲惨すぎて、思わずフリーズしてしまっていたのだ。  
危ない。かれこれもう、十秒ほど意識が飛んでいた気がする。  
しかし、ここからはしゃつきりしなければならぬ。

事態は一刻を争うからだ。

えーつと。

なんか処理しなきゃいけない事がすごい増えた気がするけど、とにかく落ち着こう。とにかく順番に行こう。見つけた順に整理しよう……。

主人公、美津子にしっかり肩を持たれながら、必死で目の前の状況を理解しようとする。

まず、今自分が両手いっぱいに抱えている、持ち主不明のオレンジ。

これを、あと四歩ほど行つたところにある最後の一個を拾って、コンプする。

それから、持ち主を探して届ける。

こちらについては、難易度は低そうだ。

今日の前にいる、やたら距離の近いおばあさん——つまり美津子の持つレジ袋が、思いっきり破れているからだ。

本人はまるで気づいていないらしく、ここまで豪快に落とし物をしてなお無自覚なのはすごいが……おそらく彼女の物だろう。

次に、定期入れ。

周囲に探し物している人はいない。だから、予定通り交番に持っていく方針でよさそう  
だ。

それから、倒れた自転車。

誰が倒したのかはこの際どうでもいい。問題は倒れている数である。

それは、主人公が一人で何とかできない量ではない。しかし、少ないとは言いがたい数  
だ。

その上、この台数に押しつぶされて下敷きになってしまった、ピンクの子ども用自転車  
の安否が気になる。……できるだけ早く救出しなくては。

それから、それから、このおばあさんの道案内。

地下鉄『逢瀬学園前駅』は隣の駅だ。

ひとまず最寄りの『鵠中央駅』まで連れて行って、地下鉄経由でたどり着いてもらうの  
が最適だ。この人が自力で切符を買えるのかはちよっと心配だが、そこから先は駅員さん

に任せよう。

そして、さっきから泣き続けている迷子の男の子。

近づくようにも美津子がカットインしてくるのでいまだに声をかけられていないのだが、発言の内容からするに、おそらく迷子。

目の届かない所に行かれては困る。早急に手を引かなくては。

——だから、えーっと。その。つまり。

最初にやるべきは、オレンジを拾う事かな！

しかし主人公、ここでいよいよ脳がバグり出す。

貫徹した頭に、人助け五件同時処理は難しすぎたのだ。

そうするうちにも時は進み、事態はどんどん悪くなる。

そんな中、主人公が最終的に導き出した最優先事項は……。

〈主人公〉

「えーっと。えーっと……。

あの……！　行きましょう。逢瀬学園前駅。わたしがご案内します。  
でも、その前に、ちよーっと確かめたいが事あるんですけど」

〈美津子〉

「『きょんととして。『確かめたい事』が一体何なのかわからないので。

単純に『この子は何を質問したいのだろう？』と疑問に思っているという感じで。

決して『主人公が急に話題を変えたので、不満。なので、怪訝な声を出したり、怒ったりしている』という様子ではない」

え？」

〈主人公〉

「これ、さっき坂の下で拾ったんですけど。

このオレンジって、おばあちゃんのですよね？

袋。破れてますよ！」

オレンジの件を美津子に切り出し、ふさがっている両手を自由にする事だった。  
完璧な正解とは言えないものの、確かにある意味、最優先事項ではある。

〈美津子〉

「『まだきよんとしている。」

『逢瀬学園前駅に行きたい』という事で頭がいっぱいだったので、正しい指摘を受けてもすぐに脳が処理できない」

え？ オレンジ……？」

〈主人公〉

「そう！ わたしが抱えてるこれ！

おばあちゃんのだと思うんですけど……」

▲1 ここで、颯太の泣き声がフェードアウトする。聞き手に『あれ？ 子ども泣き止んだな？』と思わせる。

▲ ボイス加工あり

「ごく小さな、ほとんど聞き取れないような音量で流す」

「聞き手が『もしかして背後で会話が行われている？』と思う程度でOK」

「『颯太に話しかけている。とても優しく、穏やかに。少しも焦っておらず『子守慣れ』している感じで。」

『君』とは颯太を指して言っている」

君（きみ）、大丈夫？」

▲ ボイス加工あり

【ごく小さな、ほとんど聞き取れないような音量で流す】

【聞き手が『もしかして背後で会話が行われている？』と思う程度でOK】  
〈颯太〉

「『ぽかん』として。

颯太は本来人見知り気味で、初対面の人は総じて苦手である。

しかし、突然現れたこの女性に対しては、人見知りをするのすら忘れる。  
その位、彼女が自然に声をかけてきたので」

えっ……？」

▲ ボイス加工あり

【ごく小さな、ほとんど聞き取れないような音量で流す】

【聞き手が『もしかして背後で会話が行われている？』と思う程度でOK】  
「【颯太の目の前にしゃがんで、視線を合わせながら話している。

颯太の肩に優しく手を置いて、ゆっくりと伝える】

もう安心して。お姉ちゃんが居るからね」

▲ ボイス加工あり

「ごく小さな、ほとんど聞き取れないような音量で流す」

「聞き手が『もしかして背後で会話が行われている？』と思う程度でOK」  
〈颯太〉

「泣きながら、それでも返事をする。

ぽかんとしていたが、少し会話できるようになる。

初対面の相手の言葉にすぐ返事をするという事など、颯太的にはまずありえない。  
しかし、今はそれができている。もちろんこれには、颯太自身も無自覚なままである」  
えええー……？

お姉ちゃん、だれえ？」

▲ ボイス加工あり

「ごく小さな、ほとんど聞き取れないような音量で流す」

「聞き手が『もしかして背後で会話が行われている？』と思う程度でOK」

「優しくあやす。いかにも手慣れた様子で」

んー？ 私はね……」



※ここで二人の会話は聞き取れなくなる。美津子が大きな声を出したので  
※美津子のセリフから逆算して、ここで会話がちょうど終わるように調整する

〈美津子〉

「〔上品に驚いた声を出す。〕

驚いて尚、なんだか間延びした、マイペースな声。

美津子はここで、ようやく主人公が抱えているのが自分の落とし物だと気づいた。

このように、美津子はボケているわけではないのだが、状況判断能力にかなり欠けている。

主人公以上に、並列処理ができないタイプなのである」

ああ！ やだあ。それ私のだわあ」

ようやく合点がいったのか、美津子の表情が、急に表情が明るくなる。  
初めて会話が成立した事で、主人公の顔も明るくなる。

〈主人公〉

「そうですよね！ おばあちゃんのですよね！」

〈美津子〉

「マイペースながらに感激した様子で。

自分の落とし物を拾ってくれた、主人公への感謝の気持ちで一杯。

その代わり、今度は『自分は逢瀬学園前駅に行こうとしており、主人公に道案内を頼んでいた』という事実を忘れる。

また、主人公の『そうですよね！ おばあちゃんのですよね！』という言葉も聞こえていない。自分が伝えたい事だけを話している」

あなた、拾ってくれたの？ いい子ねえ！」

〈主人公〉

「で、ですね。実はまだあそこにありまして……」

〈美津子〉

「きょんとして。

最後のオレンジを見つけられていないので」  
ええ？ まだ落ちてる？ ……そうなの？」

〈主人公〉

「え？ いや、そこに……」

いやいやいや！ あるんだ！

守らなきゃいけないあなたの持ち物が、まだそこにあるんだよ！

主人公、オレンジのありかを美津子に教えるため、ほとんど伸ばせない指で、必死にその方向を指し示す。

これによって主人公と美津子は、同時に同じ場所を見る事となる。  
すると確かに、果物はあった。

しかし次の瞬間、それは真上から伸びてきた、真っ白な手の中に吸い込まれる。  
主人公達の代わりに、拾ってくれた人が居たのだ。

〈主人公〉

「……………！」

それはまるで、映画のワンシーンのようだった。

そこに居たのは、主人公と同じ制服を着た女の子だった。

その顔は最初、髪の毛で隠れてよく見えなかった。

ただどすぐにボブヘアが風に揺れ、主人公は『彼女』と目が合う。

そのまま『彼女』はこちらを見て穏やかに微笑むと、先ほどまで泣き叫んでいたはずの男の子の手を引いて……こちらに、オレンジを差し出したのだ。

### SE3 七緒の足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

〈主人公〉

「……………」

その手があまりに綺麗だったものだから、主人公は言葉を失う。

『ありがとう』と言うべき唇が動かず、その代わりに数秒間、ぽかんと彼女を見ていた。だから、

……あれ？

そういえば、男の子、泣き止んでる。

——まさか、この人が？

と気づいた時には、『彼女』の方が先に口を開いていた。

「【落ち着いた、さわやかで、とても感じのいい声で。

いかにも『しつかりしている』『仕事ができそう』『おじさん、おばさんウケがものすごくよさそう』といった雰囲気の『最高に好印象な女の子』という感じで”  
はい。最後の一個です。これで全部”

〈美津子〉

「【驚いて感謝の気持ちを伝える。

今度は『七緒が自分のオレンジを拾ってくれた』という事しか考えられなくなる”  
あら！　ありがとう！”

SE 4　七緒がレジ袋を差し出す音

【最初から最後まで流す】

「【優しく、少しゆっくり目に話して、美津子と主人公に行動を促す。

七緒は、美津子のような、ちよつとマイペースなタイプの人間の相手をするのに慣れている」

それから、この袋使つて下さい。

オレンジ。この中に全部入れましょ」

つり目の、すらつとした女の子だった。

落ち着いた雰囲気、大人っぽい女の子だった。

明るく爽やかで、所作の一つ一つに品があつて。

ごく自然に主人公達に手を差し伸べ、複雑に絡み合つた困り事を、すんなりとほどく。

だから主人公は、素直に見とれた。

ただシンプルに『なんて素敵な人だろう』と思った。

だが、この光景を、主人公をよく知る第三者が見ていたとしたら、きつとこんな意見を述べたはずだ。

『とても可愛い子だけど、むーちゃんとは違うタイプだね』と。

つまり彼女は、主人公が普段『好みど真ん中』と認識しているタイプとは、正反対と言つてよかった。

だけど、そんな事とは無関係に、主人公は惹かれた。

それは、言葉ではうまく説明できない。

けれど——……なぜかピンと来たのだ。

▲ ボイス加工あり

【左耳だけに聞こえるようにする】

「【落ち着いた声で耳打ちして。

『どんな状況です？』とは『どういった状況なのでしょうか』という意味。  
目視でおおむね把握したが、誤認してはいけないので、主人公に確認しようと思っ  
ている」

あの。今ってどんな状況です？」

しかしここで、主人公はハッ！ と我に返る。

……そうだ。見とれている場合じゃなかった。

と。

彼女のお陰で劇的に改善されたとはいえ、事態は変わらず一刻を争うのだ。

〈主人公〉

「……えっと。

こちらのおばあちゃんは道わかんないみたいで、男の子は、お母さんとはぐれたみたい」

「優しく、真剣に相槌を打つ。

颯太の件についてはすでに把握しているが、変わらず真剣に聞く」  
うん」

相槌を打つのは、はつきりと聞き取りやすい、低めの甘い声だ。

主人公の頭はいまだ混乱しており、この状況について行くのがやっとだ。それでも彼女の声を聞いていると、不思議と心が落ち着く。

脳にかかったもやが晴れて。たとえば、もうちよつとちゃんと寝ていて、推しにトラブルも起きていない……そんな、いつもの自分に戻れるような気がしたのだ。

〈主人公〉

「で、あっちでは自転車がめっちゃ倒れてる。倒した人は、ちよつとわかんない。おばあちゃんのフルーツは……これで全部回収できたと思う」

「優しく、真剣に相槌を打つ」



うん」

知性を感じさせる穏やかなトーンが、主人公の身体に、心地よくしみわたる。

『この人が味方してくれるなら、なんとかなるかもしれない』  
そう思える。

### 〈主人公〉

「それから、こっちは今拾った定期入れ。

持ち主はわかんないけど……ギヤルっぽい見た目だし、区間が逢瀬学園駅前だから、逢瀬学園の子のじゃないかなって思ってる。早めに交番に届けた方がいい」

だから、自然と言葉が出て、ちゃんと情報を伝えられた。

主人公は引っ込み思案なオタクで、特に華やかな雰囲気の人の前では、緊張して、うまく話せなくなってしまう小心者だ。

だけど彼女とは、なぜか難なく話せた。

『この人は大丈夫』と、今初めて出会ったのに、なぜかそう感じたのだ。

「【優しく、真剣に相槌を打つ】

わかりました。

【ここから、主人公の言葉を復唱する。

自分が主人公の説明を正しく理解できているかどうか確認するため。

また、当然のように主人公の事を『先輩』と呼ぶ。

聞き手に『？　なぜこの子は主人公の方が上級生だと知っているのだろうか？』と思わせる】

先輩が来た時にはもう、オレンジが散らばってて、自転車が倒れてて。  
おばあちゃんが道に迷ってたんですね。

【『落とし物と』の『と』は『という事ですね』の略】  
で、その定期入れは落とし物と。

【少し間をあけてから。

一瞬『どうする事がベストか』を考えてから話し始めるイメージで。

なお颯太の事は、すでに『そーくん』とあだ名で呼んでいる】

じゃあ、私はここで自転車直しながら、そーくんのお母さんが来ないか、一緒にもうちよっと待ってみます。

先輩は、おばあちゃんのご案内をお願いします。

【少し間をあけてから。

優しく穏やかに。今度は美津子に話しかけている】

おばあちゃん、もう大丈夫ですよ。この方が連れて行ってくれますから」

ん？ 先輩……？

〈美津子〉

「上品に驚いた声を出す。驚いても、あまり大声にはならない。

やはり驚いて尚、なんだか間延びした、マイペースな声。

美津子は七緒に切り出されるまで、すっかり自分の目的を忘れていた。

しかし、これによって、ようやく自分を待っている友人の事を思い出す」

ああ。そうだ。そうだったわあ！

私、逢瀬学園前に行きたいの！

「ここでようやく、主人公と七緒にも都合がある事を思い出し、心配し始める。

つまり、さんざん主人公を振り回していたが、美津子には本当にまったく悪気がなかつ

たのである」

でもいいの？ あなた。学校は？」

〈主人公〉

「大丈夫ですよ！ まだ時間あるんで。

じゃ、行きましたよ？」

〈美津子〉

「『穏やかに、のんびりと。』

主人公が連れて行ってくれる事がわかり、すっかり安心している』  
そう？　じゃあ行きましようか」

……あれ？　この方、三年生じゃないのか？

大人っぽいから、てっきり先輩だと思ったんだけど。

というか、どうしてわたしが『先輩』だって、知ってるんだ……？  
わたし、何も言っていないよな？

主人公、そんな疑問が沸くが、今はこれについて考える暇もない。

のんびりしていたら、主人公だけでなく、協力者である彼女まで遅刻してしまうからだ。  
だが、それでも最低限伝えなくてはならない事がある。

〈主人公〉

「あ、おばあちゃん。ちょっとだけ待って下さい」

〈美津子〉

「『穏やかに、のんびりと。待つてほしい理由はわからないが、素直に従う』  
ん？」

主人公、早速出発する気になっている美津子を一瞬引き止めると、慌てて口を開く。

〈主人公〉

「……あの！」

「『優しく続きを促す。』

まるで七緒の方が主人公よりも先輩かの雰囲気です。

だが実際は『まだ話すべき事や、不安な事があったけ？』と、少し不思議に思っている。

『自分がお礼を言われるような事をしている』という発想はない  
ん？」

〈主人公〉

「ありがとう。声かけてくれて。すごく助かるよ……！」  
本当にありがとう」

すると、彼女がきょとんと目を見開く。

深い色の大きな瞳が、まっすぐに主人公を見る。

それは間違いなく現実の……『三次元』の女の子のものはずだ。  
だけど主人公には、そうとは思えないほど美しく思えた。

『実は彼女、『封魔のツバサと白き空』に今週から登場する新キャラです』  
——そう言われた方が、よっぽどしっくりくるくらいに。

「息づかいだけで表現する。  
少し驚く。」

この切迫した状況でも、最初にお礼の言葉が出てくる主人公にどきっとしている」  
……！

「だが、すぐに持ち直して。

穏やかに、にこやかに『そんなのは当然の事です』という感じで。

七緒は、主人公に少しでも良い印象を持たれたい。

なので『余裕ある、頼れる謎の女の子』であろうとする」

とんでもない。

「ささやくように、優しく行動を促す。

『？』と疑問符が付くが、疑問形ではない。『語尾が上がる』のみ。  
まるで七緒の方が主人公よりも先輩かの雰囲気で。

七緒は、根本的にネガティブ思考である。

七緒は人に何かをしてもらうと、嬉しくてすぐに相手に好感を抱いてしまうタイプだ。  
そのせいで、相手を実際よりも良いものに捉えて、期待しやすい。

七緒自身、その自覚がある。なので今では、相手に期待しすぎてしまう事を非常に恐れており、避けようとしている。

だから、『主人公は自分に好感を持ってくれている』のではなく『主人公は、自分を巻き込んでしまった事を申し訳なく思っている。だから、早く移動を促した方がいい』と解釈する」

だからここは任せて？ 行っして下さい」

〈颯太〉

「『また少しぐずってしまおう。』

七緒のおかげでだいぶ落ち着いていたが、話の内容を誤解し、不安になっている。

颯太は『主人公と美津子だけがどこかへ移動する』のではなく『四人全員でどこかへ移

動する』と勘違いしている」

うええー……。駅行くの？ お母さんは？」

「優しくあやすように。」

颯太の懸念を優しく否定しつつ、これからどうすべきかを具体的に指示する」  
んーん。そーくんは、ここでお姉ちゃんと一緒にママ待ってよ？  
大丈夫。すぐに来てくれるからね」

〈颯太〉

「【まだ少しぐずりつつも、七緒の言葉に安心して、素直に従う】  
うん。わかった。ぐすつ。ぐすつ……」

〈主人公〉

「じゃあ、ちょっと行ってくる。すぐに戻ってくるから！」

「【嬉しそうに、だが穏やかに落ち着いた様子で。

少しも慌てておらず、こういった状況をさばくのに慣れ切っているのがわかる感じで】  
はい。また後で！」



SE5 主人公と美津子の足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん早くなる】

【フェードアウトする】

こうして『彼女』の登場により、主人公はむーちゃんの事を八時間ぶりに忘れた。  
突如現れた、名前も知らない女の子に、目も心も奪われた。

だけどそれは、主人公のむーちゃん愛が足りないという事ではないはずだ。

むしろ、これこそが正しい形といえるだろう。

むーちゃんは『必ず戻ってくる』と言い、主人公はそれを信じたいと願っていた。

そうするのが、自分に取ってもむーちゃんにとってもベスト。そう思っていたからだ。

ついさっきまではそれができず苦しんでいたが、今は自然に実行できている。

つまり今……主人公は見知らぬ女の子によって、ようやくになりたい自分になれたと言えるだろう。

〈主人公〉

「……………」

美津子と共に『鵜中央駅』への道を進む主人公の額に、ふわりと一陣の風が吹く。  
ここは平和な地方都市で、今日はいつもの月曜日のはずだ。  
だけど、主人公にとってはとくに、特別な朝になっていた。

▲1 一度フェードアウトする。

SE6 二人の足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

▲2 まで流し続ける】

「『ようやく一息つけた』という感じで。

特に疲れてはいない。七緒は体力がある。

また、このような事はアルバイトでは日常茶飯事なので、慣れ切っている」  
はあ……！ 何とか片付きましたね。

【さわやかに、穏やかに主人公をねぎらう。

やはり『最高に好印象な女の子』という感じで」  
お疲れ様でした！」

あれから約三十分後。

主人公は例の『彼女』と一緒に、学校への道を歩いていた。

あの後二人は、五件のタスクをすべて完璧にクリアし、かといって急かされる事もなく、のんびりと登校する運びとなった。

なぜなら、交番に居たお巡りさんが学校に電話し、事情を伝えてくれたからである。

一度は遅刻を覚悟した二人だったが、意外にもそうはならなかったのだ。

何せ、居合わせたお巡りさんは主人公の顔見知りだ。

主人公は交番に入るなり『また君か』と言われ、二人が事情を話そうと口を開く前には『わかった。任せておいて』とすべてを察されていた。

かくして二人は颯太の保護と、落とし物の保管を求めて向かった交番から学校に連絡してもらい、さらに『遅延証明』と同等のものを出示してもらえる事となった。

さらに、遺失物届を書いていると、今度は颯太の母親が現れ、迷子問題も解決。

二人は『遅刻の正当な理由を証明できたので、慌てずゆっくり登校して来て良いですよ』とお墨付きをもらった上で歩いていったのだった。

〈主人公〉

「そっちこそお疲れ様！」

颯太君の件が一番心配だったけど……。無事にお母さんと会えて本当に良かったよな！」

「(とても)機嫌、かつ安心した様子で。

主人公の言葉に同意する。それと共に、ここまでの経緯を述べる。

『そーくんママ』は『颯太の母親』という意味」

ほんと、そーくんママと交番で会えて良かったですね。

お巡りさんが学校に連絡してくれましたから、遅刻扱いにもならないし。

色々運が良かったです」

隣を歩く彼女はとても晴れやかで、心からこの結果を喜んでいるようだ。

その姿に主人公はホツとし、同時に、今、自分と彼女が同じ気持ちでいるらしい事に嬉しくなる。

だが、たとえ遅刻扱いにならないとはいえ、彼女を巻き込んでしまった事、彼女が一時間目に参加できない事は変わらない。

なので主人公は、この件について謝罪するため、恐る恐る切り出す。

〈主人公〉

「でも、ごめんな。わたしのせいで、あなたまで一時間目、間に合わなかった」

「『まったく気にしていない』『こんなのは、当然の事』という感じで。

やはり『最高に好印象な女の子』という感じで」

ううん？ 気にしないで下さい。

「ちよっとおどけて。『あんな』を『あーんな』と、少し強調して言う。

作業中は颯太が心配なのもあり、黙々と落ち着いて対応していた。しかし七緒自身、内心『こんな大変で、なのに、ちよっと笑っちゃうような事ってある!!』と思っていたので」

あーんな大変な事。一人じゃ無理ですもん。

「さりと。さも『お手伝いする事』は当然の事であるかのように言う」  
お手伝いできて良かったです」

〈主人公〉

「……！ そっか。ありがとう……」

「『思わず笑顔になる。』

主人公のホツとした表情が可愛くてたまらない」  
ふふ♡」

しかし、彼女はまるで気にしていないようだ。

これを主人公は『人として当然の事をしたから』『美津子達の役に立てたから』『堂々と一時間目をサボる理由ができたから』なのだろうかと解釈する。

だが、実際はそれだけではない。

彼女は主人公が想像もしていない、もっと別の所にも、強い喜びを感じていた。

また……主人公がその理由を想像もできない事にすら、彼女は嬉しくなっていたのだ。

〈主人公〉

「ていうかさ。あなた、すごかったな！

段取りがいいって言うか、すっごいテキパキしてるって言うか……。

えーっと、えーっと……」

だから、何も知らない主人公はすっかりはしゃいでいた。

なぜか彼女には緊張しないのをいい事に、興奮気味に彼女を褒めていた。

だが、肝心の彼女の名前すら知らない事に気づくと、主人公は途端に恥ずかしくなって、

もごもごしてしまふ。

ただ一言『名前教えてくれるか?』と言えはいいだけなのに、なぜかそれができなくなってしまうのだ。

「〔内心ちよつと慌てつつ、まるでそうは見えない落ち着いた様子で名乗る。

『これは、おそらく名前を聞こうとしているのだ』と察したので。

七緒にしては珍しく、完全にうっかりしていた。

わざとではなく、すっかり名を名乗るのを忘れていたのだ。

それは『自分が主人公の名前を知っているので、逆も成り立つ』といった思い違いをしていたからである。

このように、七緒は『仕事モード』の時は隙のない女性だが、そこから離れると、意外と抜けたところがある」

あ、名前。言ってませんでしたね。

私、一年の桐生（きりゆう）です。桐生 七緒（ななお）っています」

〈主人公〉

「桐生さんか！」

わたしは二年の染谷（そめや） あんず。よろしくな。

一年生なんだね。大人っぽいから、てっきり先輩かと思ったよ」

だが、主人公が勇気を出す前に、彼女の方から名乗ってくれた。  
だから主人公は

そっかあ。きりゆうさん……。

きりゆう　ななおさんかあ。素敵な名前！

どんな字を書くんだろう。

わかんないけど、とにかくなんかすごい、イメージぴったりの名前だ！

と、またドキドキする。

このように主人公は今、フィクションの世界……つまり『二次元』の存在のように感じのいい七緒に出会い、お近づきになれた事実にときめいていた。

それはまるで、新しい推しができる感覚に似ていた。

つまり主人公は、七緒を『素敵だ』『感じのいい人だ』と思いつつも、彼女と、三次元の人間同士として親しくなるビジョンを持てていなかった。

彼女をあくまで別世界の人間だと認識し、『自分が彼女に、一方的に良い感情を抱く』だけで、その逆はあり得ない。



そんな、一方向しかありえない関係だと思い込んでいたのだ。

だから、主人公は気づかない。

七緒が今、どんな気持ちで主人公のそばにいるのかなど考えもしなければ、その裏に隠された気持ちなど気づきもせずに、ただ……この状況に感激していた。

「【穏やかに。特に驚いたり、謙遜したりする事なく受け入れて、お礼を言う。

『実年齢より大人っぽくて、落ち着いている』と褒められる事には慣れているので。

しかし内心では、くるくる表情の変わる可愛らしい主人公の姿がほえましく、ときめいている」

あははっ。ありがとうございます。

【話題を切り替える。

自分の事よりも、主人公の話がしたいので。

主人公がいかに人助けをし慣れていて、鮮やかな手腕をふるってくれたかについて話したいので」

でも、先輩こそすごかったですよ？

【声が弾む。主人公を堂々と褒められるので。

ここから、『すごかった』根拠を述べる」

遺失物届（いしつぶつとどけ）のピンクの紙。書き慣れてましたし。

お巡りさん達ともお知り合いでびっくりしました」

こうして会話は続いて行く。

主人公だけが知らないところで『答え合わせ』が始まっている。

〈主人公〉

「かっこいいかあ？ 単によく落とし物を拾うから、覚えられちゃったただけだよ。もうなんか、常連扱いされてるっていうかさ」

「上機嫌で笑う。」

主人公が想像以上に『人助けマスター』だったので。

交番での会話から何となく察してはいたが、『常連』扱いされる程の関係である事は知らなかったのだ。

ますます主人公の事が好きになる」

あは♥ 常連なんだ♥」

〈主人公〉

「そう。だから『また君か』とか言われちゃうわけ。

……とにかく、すつごく助かった！ わたし一人じゃ、早々に詰んでたよ」

「少し間をあけてから。」

実際は、わかっていて尋ねている。

すでに『とある人物』から、主人公の『人助け伝説』について聞いているので。

また、自分が褒められた事についてレスポンスするよりも、主人公の事が知りたい。このように七緒は意外と衝動的で、無計画で、前のめりな所がある」

って事は、いつもこんな感じなんですか？

道聞かれたり。迷子ちゃん助けたり」

〈主人公〉

「倒れてるもの直したり？」

「上機嫌で、穏やかに主人公の言葉を復唱する」

そう。倒れてるもの直したり。

【確信めいた口調で。事実、『そうである』事を知っているのだから  
色んな人、一杯助けてるんでしょ」

その時、七緒が目を細めて微笑み、なぜか確信めいた口調で言う。  
だが、鈍い主人公はそれでも気づかない。

？　なんか桐生さん、ちょっと買いかぶりすぎ感あるけど……。

確かに目の前で人助けしたり、お巡りさんと仲良さそうにしているとところを見たりしたから、そういう風に捉えた。の、かも？

としか思わず、素直に質問に答えている。

〈主人公〉

「……まあ、そうかも。

なんか放っておけないって言うか。それが人としての義務って思うって言うか。  
見つけたら、自分が何とかしなきゃいけない気持ちになるって言うか」

「【嬉しくて笑う。

主人公が、想像していた通りの優しい人だったので。

また、誰が聞いても褒められる事をしているのに、もごもごと、恥ずかしそうにしている主人公の事が可愛くて仕方ない」

やっぱり♡

【まるで『そんなあなたが好きです』と言っているかのように言う。

主人公とは今出会ったばかりのはずなのに『絶対に優しい人間』と確信している様子で。

これは、一見単純に主人公を褒めているだけだが、どこか不自然な印象になる。

事実七緒は、主人公の人柄を知った上で発言しているのだ】

優しいんですね。

【少し間をあけてから。やはり確信めいた口調で】

先輩がそういう感じの人だから、おばあちゃんも話しかけてくれたんでしょうね」

〈主人公〉

「えー？ 単にわたしがその場にいたからってだけだろ。偶然だよ」

「【可愛く、穏やかに反論する。主人公の意見には反対なので。

わざと主人公の『えー？』を真似して言う】

えー？ そんな事ないです。

【穏やかに根拠を述べる】

困った時、たまたま近くに居たからって。

怖そうな人とか、冷たそうな人には話しかけませんよ」

〈主人公〉

「そうかなあ……。」

まあ、確かに、話しかけやすい感じではあるのかも……。」

「『声が弾む。主人公が自分の意見を受けて、考えを変えてくれそうなので』  
そう！ 絶対そうですよ。」

「しれっと言う。『絶対素敵な人だ』を少し強調して。」

やはり聞き手には違和感のあるセリフになる。

『この子、今主人公と出会ったばかりのはずなのに、どうしてこんなに確信めいた口調なんだ？ なんだか怪しいぞ』と思わせる」

私だって先輩の事、絶対素敵な人だって思いましたから」

〈主人公〉

「へ？」

だが、鈍感すぎて、自分に自信がなさすぎる主人公でも、ここでようやく『なんだかおかしいぞ』と気づく。

だが、その理由を説明する事はできない。

根拠が多すぎたからだ。

主人公には、今知り合ったばかりの七緒が、やたらに主人公について知っている風である事も。

主人公にとっては当たり前すぎる事を、とても評価してくれる事も。

そもそも、初めて声をかけてくれた瞬間から、不思議なくらい主人公に好意的な事も――一度『妙だ』と捉え出すと、途端に気になってしょうがなくなってきたからである。

「「さりと話題を変える。」

主人公が違和感を覚えているのも構わず続ける」

ねえ。先輩。さっき、落とし物よく拾うっておっしゃってましたけど。

「少し間をあけてから。」

あくまで『自然な会話の流れで、聞いてみました』という感じを装って、何気なく尋ねる。

しかし、実際は心臓バクバク。

今日、何よりも聞きたい事だったので、内心ものすごく緊張している。

確実に『拾った』という答えが返ってくるとわかっていて、それでもドキドキしている」  
もしかして。スマホも拾った事ありませんか？」

〈主人公〉

「？　あるよ。どんなスマホだ？」

だけど、主人公はやっぱり寝不足だった。

質問をされると、それに回答する事に気を取られ、さっきまで気になっていた事を、つい忘れてしまう。

だから、主人公は気づかない。

当然のように頷く主人公の姿に、七緒が目を潤ませ、一瞬、声を詰まらせた事も。今、七緒が、内心泣きそうになりながら、

あー、やっぱり。

『あの子』から聞いた通り。

この人にとって誰かに優しくする事は、当たり前前の事なんだ――……。――

と、思っていた事も。

「息づかいだけで表現する。」



息を吸う。

泣いてしまわないように、一度息を吸って、それから話す」

……。

「あくまで、自然な態度を装って返答する。

しかし、本当は泣きそう。

話に聞いていた通り、主人公にとって人助けは当たり前の事で、自慢するような事ではないのだとわかったので。

実際に話した事で主人公の人柄を理解し、とても好きになってしまったので」

白い、白鳥（はくちょう）っぽいデザインの奴です」

〈主人公〉

「ああ！ 覚えてるよ。拾った。で、さっきの交番に届けた」

もし、先ほど。

交番に居たお巡りさんたちがそのスマホの件について知っていたのなら、きっと事態は大きく変わっていた事だろう。

だけど、実際はそうならない。

話題のスマホは紛失という短い旅を経て、今は持ち主の手元にある。

その全容を知るのは持ち主と、持ち主と近い人物の二人だけ。

当然そこに主人公は含まれておらず、拾った人間でありながら、断片的な情報しか持っていないかった。

それが、今この瞬間の会話につながっているとも知らずに。

「あくまで平然と振る舞うが、本当は泣きそう。

今日の人助け騒動で『主人公にとって誰かに親切にする事は、本当に当たり前の事なのだ』と理解したので」

うん。それね、私のなんです」

SE7 七緒がスカートのポケットからスマホを取り出す音

【最初から最後まで流す】

「少し間をあけてから。

なんとか、自然な態度を装って発言する。

制服のポケットからスマホを取り出し、主人公に見せてから話し出すイメージで」  
ほら。見覚えありません？」

〈主人公〉

「あぁーっ！」

「満足げに微笑む。

主人公のリアクションを見て『本当に自分のスマホの事を覚えていてくれたのだ』と確信したので」

ふふ♡」

〈主人公〉

「これ。あなたのだったのか……！」

そっか！ ちゃんと持ち主に届いて本当に良かったよ。

ほら、そういうの。拾った側は教えてもらえないからさ」

主人公が、当たり前前のようにそう語る。

だけど、七緒は知っている。

『正確には違う』と。『それは、お礼をもらう権利を放棄した場合のみだ』と。

つまり主人公にとって、誰かに親切にするのは無償の奉仕で、お礼を受け取るという発想がすでになくなっているくらい、当たり前前の事なのだと。

もしかしたら……こうして直接七緒が見せるまで、そのデザインすら、記憶から消えていたかもしれない。

「とても嬉しくて、声が弾む。

できるだけ何でもない事のように話そうとしていたが、喜びを隠しきれない。だがその一方で『こんなの、主人公にとっては大くさんしてきた人助けの一つで、特別な事でも何でもないんだろ？』と思うと、胸が切なくなる」  
はい。そうなんです。

【『本っ当』を強調して。

『本っ』でぺこりと頭を下げ、『当に〜』で頭を上げて話しているイメージで。今、自分の頭に浮かんだネガティブな想いを打ち消すかのように。

七緒はこのように、何かを強調したい時『っ』を入れて話す癖がある」  
その節は、本っ当にありがとうございました。

【『具体的に誰から聞いた』のかは言わない。しれっと隠す。

しかし、これによって、またもどこか違和感のあるセリフになる。

それは『同じ学校の女子生徒』という情報だけではとても特定できなさそうなのに『努力すれば必ず出会える』と確信しているかのような言い方をしているからである。

七緒は自分の事を隙のない女性だと思っている。だが、根本的に嘘が下手で、うまくつ

じつまを合わせているつもりが、実際はそうならない事がある」

うちの学校の人が届けてくれたって聞いてたから、私ずっと探してたんです。何とかして、直接お礼を言いたくなって。

ついに会えましたね」

このように、七緒はうまく誤魔化したつもりでいた。

しかし、これには誤りがある。

七緒は、七緒自身よく知っている事について失念していたのだ。

だから、さすがの主人公でも気づいてしまう。

ん？　こういうのって、拾った人の情報は、持ち主には教えない決まりじゃなかったっけ。

こちらが『お礼は受け取らない』ってサインした以上、持ち主に個人情報伝わらないはずなんだけど。

……まさかあそこのお巡りさん、『拾ったのも持ち主も年の近い女の子だから、ちょっとくらい教えてもいいか』とか思ってたって喋っちゃったのかなあ？

いや、それはないよな。そういうのって、法律で決まってるはずだもん。

じゃあ、どうして桐生さんは……。

「【独り言のように】

……もし会えたら、好きになっちゃうかもって思ってたけど。

【とても嬉しそうに。今度は、主人公を正面から見つめて言う】  
想像以上でした」

〈主人公〉

「え？」

だけど、結論を導き出す前に、七緒が切り出す。

不意を打たれた主人公は、その意図がわからず、首をかしげて聞き返すのみだ。

「【とても嬉しそうに】

だからね」

▲2 ここでSE6がストップする。

気づくと、七緒が足を止めている。

これにならって主人公も立ち止まり、次の言葉を待つ。

つまり、主人公という『自称・普通の人間』は、まったく予想していなかった。自分ができる事は、誰にでもできる。

だから自分のしてきた事は、大した事ではない。

本気でそう思って生きてきたから、これから起こる事を、一切想像できない。

「さらっと、嬉しそうに言う。

まるで『今日はいいお天気で嬉しいですね』とでも言っているかのような気軽さで。だが、これは傷つかないための予防線である。

たとえば、もっと真剣な口調で言って断られたり、冗談だと受け取られたりしたら、七緒はとても耐えられない。

たとえば『好きになってもいいですか』ではなく『付き合ってください』と言ったら、返事はイエスカノーしかなくなってしまい、あいまいな関係にはなれなくなってしてしまう。

だからわざと『気軽に、まるで冗談みたいに、好きという気持ちだけを伝える』という、主人公をもっとも混乱させる方法を取ってしまう」

私、先輩の事好きになっちゃいました。好きになってもいいですか？」

〈主人公〉

「えっ？ え……？」

それって、もしかしてわたしに言ってるのか……？

それは、今日何度目の思考停止だった事だろう。

主人公は数秒ぽかんとし、それから何回も目をしばたかせたのち、震える指で、おそろる己を指さす。

すると七緒が笑って大きく頷くから、主人公の顔はみるみるうちに真っ赤になり……まるで茹で上がったかのように熱くなる。

……ところで主人公は奥手な少女だったので、これまで恋愛経験らしい恋愛経験はない。それでも、決して三次元の恋愛に興味がないわけではない。

むしろ、ありありにあり、『こんな自分でも恋ができるのなら、ぜひしたい！』と思っていた。

——だから、主人公は思う。

そう。そうだよ。



わたしは恋愛ってものに、ものすごく興味があった。

自分なりに理想だってあって、もし恋愛するなら、お互いの内面を、ちゃんと知った上で好きになるのがいいなって思ってたわけ。

だって、もし、そうしてくれた上で誰かが『好きだ』って言うてくれたなら。全然自分に自信を持てないわたしでも、わたしを好きになれるかもしれない。そんな魔法みたいな事が起きるんじゃないかって、ずっと夢見てたんだ。

だから……。

確かに今が、その夢が叶った瞬間なのかもしれないけど！

〈主人公〉

「ええええーっ!!」

……それがこんなに急なんて、聞いてない！

朝の通学路に、主人公の絶叫がこだまする。

その驚きようが、よほど面白いのだろう。

七緒の口許はなんだか緩んでにやにやしていて……ちよつと、意地悪だ。

「思わず笑ってしまう。

主人公の反応が、あまりにも可愛らしいので。

自分の発言が、こんなにも主人公を心動かしている事が、誇らしくてたまらないので。しかしそれは、主人公にはまるで伝わらない。

主人公は、七緒に告白されるほど好かれた根拠もわからなければ、これまで七緒が秘めてきた想いも知らない。

だから主人公にとっては、なんだかまるで、からかわれているように感じてしまう」  
ふふ♥

ここでフェードアウトして終了。